

歩 & 目 デス 足 ラテス

Vol.81

みちがみはく

「道上伯と横綱前田山」
柔道・相撲道その反骨の生き様

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー



道上伯胸像

八幡浜市から期せずして輩出した二人の人物について。
一人目は、柔道界で生涯無敗を誇り、その国際化に貢献した柔道家道上伯（1912〜2002）。その生家が、ブランド「日の丸みかん」の産地である向灘に残っている。入口には氏の胸像が建てられているが、これは1987年に、フランス柔道連盟「道上柔道アカデミー」フランス有段者会から贈られたものだ。かの国からそうした顕彰と評価をされている事自体、氏



生家

の類まれな柔道人生を物語る訳だが、残念ながら国内は元より地元でもあまり知られているとは言えない。

現在の日本柔道界を牽引しているのは講道館柔道だと言われているが、道上は京都武専派であり、これには少し説明を要する。戦前期まで京都には大日本武徳会武道専門学校というのがあり、柔剣道を中心とした武道教育では国内屈指の存在だった。通称で京都武専出と言えば、当時は社会的に一目置かれたブランド校で通っていた。今も京都に残る武徳殿（明治32年築）は、その後全国の範となり、各地に伝統建

築様式の武徳殿が相次いで建てられた。

ところが敗戦後、マッカーサーによるGHQ（連合国軍総司令部）統治の時代となり、大日本武徳会は軍国主義と武道（日本精神）の否定により解散を命じられる。戦後講道館柔道が主流になってゆく所以である。それが為、優秀な武専出の指導者たちは行き場を失う事にもなり、道上の場合は郷里八幡浜に帰郷するも、やがて1953年、フランス柔道連盟からの要請を受けて渡仏しポルドーに居住する事となる。以後かの地に柔道アカデミーを開設し、求めに応じて、ヨーロッパは言うに及ばずアフリカ、アメリカなど36カ国で柔道の普及に努めた。その間オランダで道上によって見出され、指導育成されたのが巨漢アントン・ヘーシンク。64年の東京オリンピック、無差別級で神永昭夫を破り金メダル、この大ニユースは世界を駆け抜け、それ以降国際的に柔道が普及してゆく契機ともなった。

実はオリ
ンピックの



大日本武徳会武徳殿



横綱前田山顕彰碑(愛宕山)



前田山銅像(喜須来小学校前)

3年前、世界選手権でヘーシンクは既に世界の頂点に立っている。それでオリンピックの前年、既に世界の趨勢が日本に迫っている事を国際感覚で知っていた道上は、文芸春秋に「講道館柔道に対する爆弾発言」を発表する。スポーツ化する「ジュエード」と「柔の道」を説く原点回帰の主張なのだが、祖国に対する道上流愛情表現であつたと思われる。

次いで第39代横綱前田山英五郎(1914~1971)。こちらも相撲の国際化に貢献した破天荒な人生、エピソードには事欠かない。大正3年、秋森金松として西宇和郡喜須来村(現八幡浜市)に生

まれる。高砂部屋に入門した翌29年に初土俵、しこ名は地元因んで「喜木山」から「佐田岬」と変わるが、3度破門を告げられている所をみるとその間の素行は悪かつたらしい。それが災いした訳でもないだろうが、土俵が上がって5年目に稽古中の怪我から右上腕部が悪性骨髄炎となる。患部切断もやむなし、選手生命も危ぶまれたが、慶応大学前田和三郎先生の手術により奇跡的に回復、復帰を果たす。その恩義からしこ名を改め「前田山」に。37年初入幕、翌年大関に。その後前田山得意の張り手旋風を巻き起こし、その荒っぽさから張り手は相撲技かどうかとの物議も醸す。44年11月場所で初優勝をし、47年優勝決定戦で双葉山に敗れるも横綱に晴れて昇進。ただしその免許は、粗暴の振る舞いをたし



八幡浜巡業の前田山(右上腕部に手術痕がある)

なめるタダシ書きが付いていたというから恐れ入る。大関で9年18場所、現役19年目の遅咲き横綱だったが、まだ物議が続く。49年10月場所では初日白星の後5連敗で休場、その間日米野球観戦で大問題となり、引退勧告を受けるという前代未聞の展開。結局、在位6場所という最短最弱横綱の記録になってしまい、流石にこの時は本人も落ち込んだらしい。

しかし、ここからが前田山の活躍ドコロ。先の野球観戦によって大リーグとの縁が出来、相撲界初のアメリカ巡業を成功に導き、ハワイからは後の高見山を角界入りさせる。相撲の国際化に先鞭を付けたのだった。弟子の育成も定評があつたらしい。人間万事「塞翁が馬」を地で行く、波乱万丈の人生は、71年57歳で没したが、翌年平幕優勝を果たした高見山の成長がはなむけとなつたに違いない。

このキャラ立ちした二人の逸材は、それぞれ土俵の違う活躍だったため、交流は無さそうだが、二年先輩の道上が生まれた向灘(矢野崎村)と前田山の喜須来村は、権現山をはさんで表裏。奇しくも後々柔道と相撲という日本古来の格闘技界において、大きな貢献をする事になる二人が、偶然至近距離から輩出したのも不思議な縁である。いずれも反主流の道のりにも似た歩みの中で、一本筋の通った反骨のたくましさや備えたバイタリティ。海(外)に雄飛するしか無かつた八幡浜の土地柄ともきつと無縁ではないのだろう。